三河後風土記

拾

三河後風土記正說大全卷十九二十

目錄

一信玄參州野田城攻
附城主菅沼定盈ゟ生捕并人質替
信玄幸去
一信長淺井朝倉退治
一奥平貞能信昌來服

竹島氏藏

一武田信頼抜落高天神城

一大賀倉地山田等逆意露顕

附近藤伊次郎事

一勝頼遠州出張流議

三河後風土記正説大全巻十九

信玄三州野田城攻付落城

信玄辛去

扨て信玄八月ヶ原の後刑部少輔越年者天正元年正月吉刑部を
打立て三河三万騎余人数を打纏し三州野田へ押寄る日也野田
城の籠城兵衛尉菅沼定盈と加賀守松平左近尉忠政と（忠政ハ桜井の松平和泉守家次の婿久松定俊の
弟之公の流れ日蓮宗の法華経）内れ定盈八兎角の別兵八百余人にて大敵を囲まれて
り共れも高名成八城を付ると云ふ突撃し弓鉄砲を
打倒必死を為て防ぎ仍て寄初の戦に負死人余多あれ八甲州勢
引退き翌朝の霧乃ち城上山の上を見れ八新八郎辛勝を屈割
明徴五て寄手を多ク出し大吉あり甲州の奴原怪ク少ク信玄ハ三百

みな余人なれば定盈の一拳の奮るい激塵ふせんと胴骨一変ふるを笑ふ
俗語を訴訟紛乱をなして大ふ怒り多人を引連れ迫るを云
信ふ思慮なくして責めしもふ定盈あハてこれ迫退く訴訟思を居
よりも内ハ又つる事よりつとめと退くなるふ常日知る定盈宮ふ
敗れかつて陽れ消滅として城中ふ引籠る処をやるふ迫るをと退
かくる兼る用意ふ石弩を放し大ふ巨石を雨の降らめく投落を
ふよりて訴訟の兵さん訴訟も幸ふ
して閉籠を通れうとよりふ再び城を攻るうずを巻して拒ふ
神君信玄自ら出法再ひ智用ふ城城攻る中を多石小栗大六を
ふ使として信長へ援兵を後を信長ふいまだ信玄へ和
睦せんと志ある由を聞を成ふ風気を称し又ハ他ふのよし

まて返を遣をを　神君暫往を除ふ小栗ふ降り来ふざるを拒を
へ攻ふ拒ふを城ふ人数ふ保候者をを多を集て孔を防ふ
ふ時ふ人数大ふ多ふ負ふて疲ふ音業をを多を種せしを　ふ時信玄ふ城ふ枝を防ふを人を後陣の令を
を以て城ふ水ふ多を城ふ入をしむ宮ふ於て城中水ふを入れ風湯を
及しふ菅沼ふ信玄へ使を立て援兵ふ命を助られふ定盈忠政ふ
切腹せんと云を信法ふ返事ふ多人の武勇感を多ふ金を者去ふ切腹
ふ不及者城へ交れふ多人を助へしと信し定盈忠政軍兵を引具
城を出る信玄法老を以ふ多人ふ英雄を出のかく思ふ生捕て家
来ふをへしと者四方諸を信玄用ひざして乃ふ伏兵を立しむ
新八郎を市郎を兵を和を立て伏兵を忽ふ多勢を搦
ふ信し城を出る軍勢を上を下へと騒動を信玄下知して一人も残を

為と称し兵を率ひ樓を造り注軍を見て敵の如き変の生ずるを未
城中より出撃せざる事暫有て信玄の籠城を目前にして弓鉄炮を
雨の如く射掛る中に松平左京大夫の呈書を以て別紙信人
輕装を帯し陣笠に黄色の指物を見て鉄炮を放ち馬を乗て言葉を
下知する事数あり連れて大将の旗本の鉄炮を放ち
直ちに彼大将の旗本の頭より小耳の服へ
射掛る痛手なれば引るより逆様に三代百石以上信玄の近習
弩を乗て矢を吸葉を付抱を付落ち城兵に意近寄ぬ仍て
二月十日牧田長城に相定盟忠政の為人を以て席に因て信玄の
陣を取り度と申入しに二人中に同心せん加りしに信玄と
下先甲府へ仮館に帰めと所望の儀を聞て引返さる尚甲州

へ帰陣して四月書信別年度会ふ（又は期）大切に見へ候しが
信玄に偽形を四老臣と以て所に我家伝来より於八代信虎を
甲斐に逐ふ源氏と云信玄十六歳の初陣より四方に別敵を交信別城
陣を上杉に花隈城中に後河を江三河天竜十ケ郷の隆を比法に
撰兵と元亨二刻もなく武官に於て今日本に肩を双る者有へからず
移る運の至る不思議に家死して三年の内に隠く陽を
見る勇て石紙に書形を押し至ぬ信玄の生死を知らんと法下
書状者今に御に返事を認よ相信家臣書侍知門に偽形
陽見せ之事代の旅人字義 孫子の旗

其子孫に譲ひ是北に今に其疾如風其徐如林侵掠如火
不動如山と就て旅の後に天上天下唯我獨尊と有

地獄落ちと出でへらんに信濃十六歳初陣の時孫子の旗と誇し給ひ旗幟
おさへし法師法螺の鬼八幡彫ふ与ふ所八今之の大文字を指さすと七
歳北信濃と信玄の必ず敵せよ十六歳ふ初ト八家督と後を我死
さば佛事作善と為べき事なれ強を恃て法師の法ふ阿むべし油
と必後悪ふ乃ふ事なれ

信玄ふ後悪八者一ふ信虎二ふ彩義三ふ義信四ふ盲人ふ奉る
和尚六ふ謙信四ふ越後の大男七ふ今嶽の去と殺し八ふ延山へ
今ふ條八彩義徳川の大敵一身れ力ふ叶ひ難るべし輝虎と彩
むべき元義信七軍と出さは切ふと塞きて彼ら兵粮運送のつること
只所ーて一年あてよ元来信濃の上方勢敗軍敗なるべし扨又今
青道延彩と甲府へ使者ふ出でと拵し家来六七人右を出さ家来と

古屋古屋の陣屋ふ新宅明新八道延彩と三条集さ伝玄病ふて甲
府へ凶陣と陣中ふ拵せしめと世人偽とハ思ふまー信彩徴運の身なれハ
拵と爭ひ合戦せる事を用へ只家ふ静めて歌ふ為れざる用ことせよ
我の遺言ハ背ハ大敵と為ふそして合戦せは多と探出し陣と云へと
云除りて面眼を開られ一ふ皆して又面眼と云ふ事

大庭還俗肌骨　不塗紅粉自風流

と云ふて天正元年癸酉四月十二日甲の下刻行年五拾三ふて往ふ逝去と

松間の横の歌言後ふ評あり　又家老公市佐男有べき筆の年
慶安三年の内面要ふ

境ふはとと如義の新まあて元の姿八何地ふらむ
歌くまし暁も世長角ふ後ふ角ふ後ふ世長笑る筆の世長中

とに於て一ヶ所に明年所化畢有さ

松岡の橋とハ信玄大僧正任官の刻松岡橋の異號

なれ而ハ信玄ハ此の所

立ちハ小甲州にて都合九橋也松ハ弘年の色ハ多くて

てあり其比武田方不吉の歌と評あり

又月延院ハ云甲州の寺護武田信玄ハ安房守正忠と使ひて月延

山を中興の祖山へ移し玉ふ跡を城郭ふ出へしと下知を奉り老僧ハ

秋此返事中殺し祖師の心ハ伊豆へしと云滿山祖師の業家ハ生涯

を捨て一万老の陀羅尼を誦し出家元々ハ祖師の意ハ此寺

此中返答を信玄殺ハ攻入へしと聞ハ人数を下知者ハ二月

十日の事ハ信玄滿山の僧侶大業ハ集り一万部法花陀羅尼誦し

亦悪心悪退散と祈る事依其の業ハ信玄大軍を発ス也

月延の事此甲州河原を渡らんと云ふ係ハ大西川水場り沙漠抗

を捨て是を渡ハ事難し主付月延山の器ハ云ふ故殺ひ返了

本の日蓮の彫ハ甲州を加やうしと云事最の大聖ハ月延山の

法ハ七面大明神ハ神ハ甲州を常し八子の神を引連佛塔

破却の大形を計人と矢を射ら殺ハ矢大形の口の中ハ

入ると見て是ハ云云ハ云云とし果して後門信玄逝去あり

別て祖師ハ三別名を山を伊豆馬者ハ甲斐孫ハ長谷の寺

所概ハ取あ殺ハ信玄病名を蒙られし御門主お使して養法

新宮ハ松平左京亮殿人を籠城の儲へ也て殺ハ桃中嘗ハ

為人嘆第い沙人も云て主人と者ハ甲刑ハ海の出へ三河出ハ大や

らずとて西日仍て伝玄入道の云 山孫市方の人質数方
ふかりしを引分人と別さき 神去中さるふ氏仏あり先年出陣の
芸州伊予国に影響芸州刑部ふの人質出家たまふ 同月十五日三州
産所に人質を相伝玄ふ病死と称し 陣代 信孝 天正元年三月九日
三州ふ働き まとり東国へ出馬有 秋山ふ三子の兵を率て岩村の城
攻さまる城ふ岩村城主八去年病死して 其果後家八信毋友伝兵
の五男 市松丸と言子を以て籠城有 秋山是を攻て城を仍て更無の
後家を妻と可 是を妻として城を奪ひ 市松丸を生捕ふして甲州へ送る
終に天正元年四月中旬に高遠城 落井忠次病ふ入密ふ出陣して
神君へ申上るハ 誠や伝玄死去の風説者と 公仰ふ伝玄移ふ死
中に有ふ別て 対死有と者へ 北条氏 那年五十の上へ多くハ病死と云も

心地ふ成しと 作法を聖の奥ふ年 貞能ら 甲州方ふ生て内通者
あり 毎度ハ落ふ 花 御来
りて伝玄死去の事 頂を者 公ふ知て是を 氏御
なるハ伝玄の如く 弓矢を死 大将ハ去今 陽成 我ふ差年より伝
玄ハ如く弓矢を 玄習ふ べしと 思ひ 弟を 是 月 と 只 者 成 い 家ふ
弓矢の師 道 こと 中 家 源 有 を ふる 西ふ人ハ 大 親 の 伝 玄 死 去 と 聞 を
公又 忠次 数 ふ 百 我 ふ 家 中 皆 伝 玄 病 死 と 聞 ふ よ り 以 ふ 和 れ
事 に 彼 敵 と て も 名 を 記 武 将 の 死 去 を 少 て ハ 病 と 聞 へ 来 者 く
強 て 陳 ふ 不 有 の 名 将 あ れ ハ 上 下 共 ふ 一 廉 と 者 て 自 主 の 伝 を 出 る も
敵 ふ へ の 分 へ と 聞 り 大 切 ふ 五 月 ふ 五 月 自 分 と 改 る も 不 遠 ふ 法 も 正 家
原 理 で か し 原 様 の 別 敵 有 ら れ ハ 味 方 陣 の 四 五 年 弓 矢 の 心 ふ 成 く 上
下 他 と 恥 辱 と 心 ふ 成 る 通 百 廉 と 云 ふ 年 を 経 て 弾 と 弱 く 成 る

なり信玄の枕なる良将の死を聞せられ涙を流し信玄へ家人に
書をくれも信玄は死を覚悟の上なれ共病に侵されて
不治にて出陣なすに小幡氏政より山中無右衛門を使として信玄の死去
より別家一人亡ひ出る大学は時の為やとて渡辺を相部諏訪に
春日山は水軍に長られ横手よく陽渡を隔られ為に出て
小幡は上杉と伸る諏訪は北条と吐出て三方合と吐出て三方合と相渡
相模は強多敗る関東の英雄は武田信玄に今死去せられて関東の弓
矢の相ぶ為に為に是迄と大声揚て泣れ給ふ
されば諏訪は三代茶戸原山第五の相模の新参の内信
玄自筆の新書に何仕為に相見せられしに諏訪と立て隠へとの
新参諏訪に信書不叶神を祈て立去られ尚日なの名残と云

信玄の名は書を聚ら大変に信ぶ大切に酒を飲ませ給ふ
三度迄神君の下知にて年累親若一子第人にて天方の城を攻落し石川
家成は可久輪の城を攻落し内井忠次は風落の城を攻破り信玄
の時奪れる城と味方へ返せ
相模も三度東攻にて北軍義昭は信長不和にて合戦に及ば
ざる迄武田信玄は出る迄石山に要害を拵へ
軍兵を籠らる信長は十万に別石山に要害を拵へ
信玄は信長の為に人質に法師と法師を今相軍と
先年丹羽長秀峰谷無庵所に本願寺明智
上京濃中朝倉に近年信玄の合号を遂に信長大軍
と率して京都へ上り給ふ義昭は大に驚き老忌兵を方補義若乱

信長を村宗と大信へ出し相し後云を述られる信長終ふ此家に其
年の秋へ向後を怪めへて四月岐阜へ帰城あり朝倉浅井又と板ふ
勢る所五月十四日再板の諸ふ義城あり信長ふ為り経長忍ふ京都
二条城に所と攻られ東ふ板の浅と攻る羽軍ふ対して城を逃生
若侍等へ逃へ再後条あふ信長又ふ敵しふ人を京都ふ
又と為し九ハ河内の若江へ移き給へて若江の城へ送られり
終ふ年那波を多都め父子密ふ使を上方ふ住居信長
の心底仏元前一番の方へ義を後へ移へて毛利家と和睦彼西へ移
しなる怪ふして信長天下に権威を掌ふ振られり信長ハ休久月
雲田沈田ふ下を相比将軍家と信長を亡さんと企ふる信ふ浅井
朝倉ふ勢め有と四月先に別を手始し福の根を引へしてを天正元

年八月谷汝峯を去立に別ふ外に十四浅井ふ羽城大義月ヶ瀬城を
攻る大義ハ浅井ふ家ふ茶屋伊豆ハ家ふ対して先年月ヶ瀬ハ
浅井対馬海保の家ふ守りしふ不対して陥を信長ふ対ふ向ひ叶
信長て浅井を攻ん朝倉心後詰と先朝倉ふ押へを為心者浅井
ふ陣を攻義さんとて休久月雲田を大将として大嶽ふ小山田ふ陣を
近に敵ふの国を多切後詰させしと再度あり別て義京ハ信長に
別へ出張を所別朝倉武部大夫京都ふ義を義ふ為真を大将
さして北の江より田辺ふ小陣を五ふ谷表と敵ふ対ふ対又ふ馬
さて浅を信長ふ稲葉通を入を一族を招き泄言月の四ふ朝
倉ふ指無を陣へと倉に一族ふ者を守る為ふ後詰為ふ事叶
ハ浅井ふ為後見為ハ大嶽の出を拵て焼屋ふ堅ふ為り

なるに由りて心中穏しからず俄に信長の兵を焼尾に引入れ
大山嶽の城に拠り胡倉の家人安藤刑部利定小林長俊等西方院に籠
りて浅井に降参に停留して社寺方へ使を立て命を助られ候ハヽ
屋敷並方へ無事に仕り戦に及へしと信長許容為り城を受取
河内に九毛兵庫頭塚に小大信と大山嶽に籠られ居る安藤に先
より誘て云ふ並の事京大軍を率し浅井と共に近江余湖刀根山
に陣を張り中を信長営を立て宮ノ谷に大石垣を築き六箇月
程四囲に敵長途を塞ぎ八月廿日に討入へしと云り是胡倉と亡ぼさへき時節到
来なれ共十三日に一天大に胡倉の陣へ押寄る多先陣稲葉伊予
守信人曽根田滝川丹羽柴筑前一勢く移背を立て戦ひ暮れ胡倉方
多討死軍八月廿日とお待しきれお引に退き陣に籠となく信長敵兵の

機を知やし先を人軍使を立て夜胡倉引退に先を知信長自分に
陣を出勢を率して退刀根山に引る時に家田佐々木西条余湖自
敵勢に引り兵後殿に信長に伝に寄て迫りと退て敵兵
敵勢に引り兵後殿に初三千余人討死敵勢に三日迫間之陣を
の人数を云来月十八日唐中に陣つるへ信元有京物語に一説に
谷城を近江大地山田城に古坊に陣り中田稲家氏家尼京元
移を示に命して捜求る事胡倉の一族武敵京境後に義景成敗し
稲葉人出に刑信長に信長收ひ京都へ出を撤つ事掛に
敵兵平均に兵庫陽に寄に助に後に守護と命しまず栗
浅井を退治をへしとて国中に二百軍を送し八月浅井祐政の籠る虎御前
山へ攻かゝる浅井父子浅に祐政八九月彼の生年九九歳

ゆて生害ス江州敗ふ手酒せしかい木下と江州め守護不ことして
小谷北城ふ浅井弥七郎田弥太郎を隙を請て城と今浅ふ移て
長浜をいふ相信長へ秀吉ハ京極ゆ高吉乃子藤ふかくれ
居ると聞る 此者共を以知世ふ立なりて治るへしと者ふ召出さる
一人ハ若狭ゆ来る次一人ハ丹後ゆ来る知之時相公世長信坊を生捕て竹
鋸ゆて引殺を信長より北伊勢へ変向者西川所ゆ一揆を責やより
滝川ふ命し行是の一揆と攻滅し長島と攻られ
ゆ敗を別ゆ 神君武田方へ随ひ長篠の城と攻られへきなり
九月ふ玉川人数四子余ふて出浜あり長篠ふハ家康一名出野 信沼
伊豆守信信田郭九郎ふ泉源寺ふ籠ゆ攻ふ信て 別て変戦ふ信て
城籠へしか又人をかりしハ者を多ゆ 火矢と云射ふ信ふ二の丸ゆ

火薬弁兵粮玉薬粮物皆焼ふ依て 神君へ様と信長と中上馬
廻ゆ敗て和を元甲州へ退て如之江州津久ゆの仕事奥平
貞能ゆ貞能と云者 是ハ村上天皇ゆ奥平親王より十二代赤松則景
（墨別ふ信を治承年中赤松伊豆守て筆兵揚ふ時）
東国へ下向して若狭ふ属し軍功を立て別家の子孫人有婚子家祝を号法眼御帝へ仕
まり赤松別村入を命心ゆは五人の祖と二男氏行是ハ秩父の一族児玉庄左衛門尉を敗て
を家と後く乃ち奥平と名のり上別奥平の名ふ信ゆる左右字と奥平と称を
軍功玉薬ふ依て上別ふ居ゆり上別より三別へ
移りは久ゆと作を貞信八十歳ゆて奥平を法名常盤と云を奥平久と云八十一歳ゆ死を
法名を武を子貞相貞昌を子貞能ゆ貞能を九郎信昌へ
移ゆふ孫別の大ゆ今川氏ゆ恩将ゆして信人三浦左衛門ふ第ゆの
政を信ゆ弁ゆ氏ゆの旧臣隆り武ふ家又ハ信玄ハ心と者る者
多し此付を別の孫ゆも多く 神君へ内意なしゆる中ふ奥平貞能
を信昌を計りて主を別引男共城ゆ今の信州 奥尾者者ゆと称ふひ
神君へ志を者ゆふ氏ゆと少大ふ隆り奥尾と孫別へ移よて

新型たる仏法命して対をする伝てを家老に召置安藝守日が賀守父も
御めし　公へ出味方おさしめたり　をかの久世の御方久世藤家弦
初め今川氏の大臣藤二服左衛門藤家弦原何系　松平源左衛門尉　をあ　誘引
公へ降参おさしめるが去る元亀二年二月中旬武田信玄を別出陣の時
途中震御方て病気に成られ　岩沼と初信玄降
参せし事奥平入道道又は貞仍る九八郎　あ人と通ぜて中ら八今信玄
兵を発して大とこの為に震御方を殺ひ出れ殺るる　故に我信玄
に降参して此人の下風に立て家と起さんと欲すること貞能信昌
同意相伝致たり為に我て既に思ふして大臣を教害せしめ
賞を遂んが為に二度徳川家へ心を寄せを暮れ為ふより見て此
甚を家りて殺ハ　徳川の為に大命の心を懐てを恩を報へき事

命論へ今信玄を思る脳病の者先日の因を捨て急く降参に
徳川家に一族を為を殺を移ふ形かく家て平四郎恩を拔せん
為に事を行の東上を明さんと在ひ知思ひも寄ぬ由一言之欲の強きを
まて何の為へ付出ぬへ心と考るを　宮　菊武士と世信に中賀八しぬ人
生れて八僅に百年名八千歳に残されに我て此度脳病の御を八家名の
恥辱に何の附に流む　思ひもよらと中なに在文以の和に立後
して只今に世に考て仁義廉に人を破れ武に立と倒親を解て
家を絶を既に我に徳川家の譜代と云者もあり何て小義に
拘て滅亡まを為人や逆に信云に随て末代を弱の家を記
まへしと中なに貞能再ひ孫なに一度を明者と以先士を出
はを此命を捨て何て今を危に時て記ます　公を拝んや

拵て切むと欲し後に先我に訳を切腹に伝へしを首を切て伝兵に送り
涙切と雖後事九八郎を殺に拵に拵肌ぬきこうれい及天晴忠義
物をいはせんとて涙して通夜能子なりとも配義心底なり吾腹に
老僻したる心より此中を言慰を理を心得よ我家は其卒親を分
流筆して張に我に久附に面て亦三代続に我に挽きて家を全
を彼戦出に及て小原を清き大切を言を要を成に大切は
如陸を厳をして見れを思に為に朱云の今茅沼新八郎が
義を聞の協に和に意く欲に陸る此仕を害聞に及ぶ大親
を門変中を防戦に小ましを上我修に井濃き肌陸に仕て無様の狗
なり後に城に義る時に父子枕を双へて討死をるに和者に仕に腹に八
自に及に及父一命賜ある事なに此中を唯泡に世にあ世を欲し

てへ老切れ及父悪変事とは我に八し只某に実見に仕をへしと理を責
て中に不仕て頭を能を方なく及へる時九八郎を出あ公の作等
祖に中に家北に及に名を矣八人と欲し父中は義の為に命を矣八人と
爭ひあに是何れも接殺を論へ九八郎若輩の才をしてヤハ必に及に
龍に八父上に は徳川家に武隠身にて主義を全なし後へ祖父に八此九八
郎を百連に八伝兵方へ降参あれ後に八為義全に八に中に九及父
も頭能も大に感し例を家に仕を頭より頭能潔に渡れへ西井酒
忠次に対面して愚父及父道に背き伝兵に感に右に降義志を義に
に某伝を此命に成を君を接なるへきと父子の恩恵を接て池表
に入と中に伝て酒井を忠勇を感して早速接を及ひ右に
神君分に参へ百て始終を番義少し百れ示も頭能ことを云を

ら出て家ひろまハ汝ら忠志我何ぞ高ふき恩武運窮まる時ハ互ひ
に礼謝ハ思ひ給るへし然る汝ら幸二の忠心ハ命に代へきの一條有り
容易に考ふてハ都て味方に災と同空に帰へき事なれハ心中ハ秘して
いまこそ人と成さるこ汝ハ見より思やりハ立ぬり父ハ負傷人に伴
ひて信玄ら方へ降参せよ其子細ハ前時武田方ハ隠れ加担ら元
来中と見ハ敵なる共辞先と申ひ殺し家又彼ら方大敵と成汝
彼陣中ハ来て信玄ハ謀と探知て密ハ味方ハ注せ其ハ莫大の忠節
成へし応昊信玄ハ名ハ高ふ西の智恵加ると為て内好成ると為て知ふしも
事なれと忠密ハ有名ハ負能命と変て立帰り父に交と
謀て降ハ武田へ降参及て 及交に時負能と共て 跡部ハ
偽りて中道ら名ハ時者なるも徳川家へ至二の忠信を以て降

参ハ心知ハ有ハ武恵ハ帰ら之と跡部ハ頼ハ負能ら共ハ
相て答ふ為て負能ハ心して降参ハ元別 公の接密成ハ
彼ハ信玄ハ道交ら者ハ是ハ事と感して百事ハ心を重ねき
成時と謀と注ると成ハ信玄迎ハの事ハ密ハ注ると上ら成
ハ武ハ人数と発ると成ハ長篠ハ攻落し注ひしてハ 扨も長篠城
城と ハ知りて信玄ハ敵ハ為風来ハ只ハ為情実注守信房
小子事人と注て居向ら居ハ忠決表ハ武田ハ二ハ信玄ハ古屋右衛
門尉ハ村ハ八子余人と接る事利三郎四郎ハ仍多時屋ハ立出
て長篠ハ敵庭せよと下知有て長四ら成ハ多ハ長篠城代
宝賀一家肝煎伊豆ら信信日新九郎小泉源六郎ハ城と徳川家へ
援ハ注し風来ら只へ近ハ寄へ成ハ後詰と無勝を嘆て後悔を

終に城下に引き出し、武田信玄に陣中へ連て来
られ、左方より脇に告げられる若い奥平貞能父子者、徳川家へ
志を通じられる御内沈黙、方々へ内々に頼て信玄に大に移られ
行末偏の去就事を相談申、討死の覚悟者し、討死の覚悟者、
まるべし、但、必ず長篠城を捨て、武田家に属し、信玄に接近
仕る様と、宮内へ、信玄軍中に於て、長篠方より、使者来り、
こなたも、何とぞ、貞能を、刑罰あらば、如何、敵に、今川氏は
譜代の恩を信じて、大に数多害をしより、終に家を亡しさ、況や
此度、平々、志、太心、正しき、士之、能と、思慮、有べし、と、申れば、信玄
て、我も、左様、存ぜられた、ケ様に、中より、有に、非、接、恩、如何、なれ
ば、是、志、必ず、まるや、長村、之、ば、只、使、これ、何、ぞ、貞能、

此度へ、招るべし、若、遠、心、安、なるべ、ば、別、貞能、事、なん、渠、を、し、来、ざる
なるべ、ば、罪、を、定めて、討べし、と、申、れ、信玄、是、を、聞、て、陣、使、を、立、
なるべ、貞能、待、る、を、急、く、使、を、并、連、已、の、申、陣、を、立、出、る、九八郎、被、を、
只、今、急、ば、市、使、何、申、み、只、来、家、し、能、し、思、慮、比、べ、し、と、深、む、る、貞
能、眼、といふ、け、九八郎、を、偽、と、み、よ、み、かる、ば、ふ、元、人、々、殺、び、出、る、多、
なる、貞能、元、より、身、を、死、る、罪、者、て、なし、何、事、と、思、れ、捨、て、一、生、来、
へ、きと、招、る、被、と、捨、て、捨、て、信、玄、に、陣、中、に、立、る、多、ふ、信、豊、に、時、別
力、の、者、と、擇、て、其、余、人、面、て、ふ、捕、縄、掛、き、ふ、こ、い、き、古、捕、人、と、貞、能、を
逃、て、貞、能、あ、り、や、家、る、家、能、能、と、思、る、る、元、より、大、別、人、者、れ、
ば、も、腹、を、ず、肌、へ、なる、まで、目、まる、能、腹、て、者、る、を、時、信、玄、重、村
元、度、を、ふ、城、下、乗、を、出、て、信、別、に、信、川、家、内、五、武、田、家、に

亡さんと欲ぜし時は各知者者うへハ道々ふ正常
ふ德かるゝ中ゝ不貞節なるも妻を尼かゝらしと宜し尚時の人の
風俗ハ主心過てふて父ハ子と競ひ子ハ父と爭ひ夫婦ハ況
や他人ふ於て者貞節ふ武男家人心とよ日夜者心と是と切と
ふんと欲を以ふかる男心ハ風説と家ゝハ某ゝ子の不運く悲歎を
の者ハ中孤くハ漸と寡変して志偽を明らめ云ハ今ハ傷みて せよ
事ハ心と知らされハあれ社男ハ男と生ずる人心ハ人と後指とさ
中ふ世ふも安寧ふ心ハ貞節心廉ふ偽ふ而ハ仲家ふ於て
中孤ゝ人と孤肌脱猶ふ人と指て陰ふ安ふ人と言と信ふ落さ
及ふ命して押留しめいふ貞節ふ遂ゝ平日の実徳ふ
ゆ世事者へしとハ思ハ此者陰人の欲と散ふ為ふ家ふ時ふも

遂ふ生ふ男逆ふ家ふ氣欲陰ふ解ふ方上ハ隨一の男士之何て不謂
者ふ切ふ及ハさや近く者ハ孤ふ長者ふ者ハ孤ふ長ふ例近く呼出して
同着とあてあり神君ハ長ふ儒より呼ふ召ふ正論と共へさふ陰杯
神と承し合武代て返さ孤ふ貞節ふ彩の髮と生ふ虎の尾紙端
尾さと着ハ孤ふ拒も此而ふ是早ふ退ふハ又紙ひや侍人と思し
城而及者ふ四て而迫陰ふ罪ふ知貞節と陰ふ生ふ甲別ハ功
ふハ此ふ名家紀ふへしと思ふ者て已ふ陰一次地場ふ黄昏ふ
及と為て而逆と生ふ中ふ孤ハ我内間陰ふ生ふ孤ふ今ハ長長ふ
殺し今ふ主退へしと妻子帝従ふ連て仕ふの城と立退ふ九八
帝妻子と ハ甲別へ人質ふ出ふ生ふ事ふ知ハ百ふ生ふ孤ふ五ふ生
別彼ふ主退て ふ耳利ふ当兵士ふ生ふ孤ふ陰ふ生ハ奥平

八王退て近寄やうなりと声々に呼ハり三百人程迫合うと奥平
九郎兵衛殿と聞ハ相図と覚して弾正忠退き近付き貞能父子
一族ハ立て敵兵を防ぎ弾正忠家ハ命し是猶と云へのゆ父子五十余人
後陣ハ引きつゝと引退ハ其利の先鋒兵多ハ退落
里石間合坂迄て貞能九郎三郎二百ハ出て迫て地入地出従横手
黒煙と立て敵引元より父子四人切る必死の切先ハ寄ると
甲州勢三千騎計迫れハ虎口際迄寄て三度まで責る貞能ハ
能陣ことし敵を押く退て親と別れ利足ハ甲州勢再び備を立直
進ハて退る時其利の軍勢退ハ地加て七百人程ハ有
なるか我計ハ五人を立て事なき事多ハ猛将なる
主ハ九も敵後に敵近付ハ立て迫て退ハ貞能も人数を

まとめて引退されハ時方ハ是弱兵多百ハ心計ハて道を防
ぎ彼方ハ退て人数揃り其利三郎四郎隊一緒して陣を掃て出
従兵子五百余人義と雷と間を作りて退ハ貞能ハ見て
九郎ハ向て敵陣ハ大勢ハて陣暮ハ計ハて命を捨ん中
すふまし海ハ速ハ退て父の志を強へしといへと九郎大ハ面色ハ
父上計死ハ是ハ其退ハ人ハ主ハ仁義ハ篤ハ信友通父を
計せて能て事ハ有ハ貴殿ハ敵ハ人ハ作ハ計死作へしと言
を人て知へ成ハ計ハされ皆ハ皆卒三千余人ハて淀ハ大軍ハ叶
へしと思人ハ多ハ甲州勢ひしと探信ハ味方を
なるおこの者迎ハ合ハ計ハ死ハ奥平父子
ハ計死せんと身張ひ寄る如ハ遥ハ聞と多ハて助る一軍有

是より松平忠次伊丹を多聞後世廣孝同長沢帯刀康重と為て
神君は伊勢を受給ひ三百余騎を以て陣所を固め給ふ時
侍従と云物も元あり世東より中村を責後世廣孝父子沙石を
金人を以て此を攻て敵方を突崩し松平忠次伊丹を伐
を石間へ押寄し其利を以陣へ寄懸もなく敵へ多く是を見て
敵て奥平父子を初て敵中へ駆入縦横に是を駆ふ所九八郎
殊に切れ太刀を命を惜しまぬ者共と云ふ事を切て
与力甲州勢大将数十三方より烈敵切立ら々ふ伝て其利
多勝を得て後の礼数を高く紙を及ぶ所に徳川伝て高く
引退く時元亀元年八月廿日の事なり之を初て 神君より
加勢として平岩七蔵親吉内藤金一郎を馬上百騎鉄炮百挺を伝ら

比も〻ふ奥平の勢七百騎ふ成ふる徳如武田左馬介信豊
奥平父子ふ切掛れる事此の節ふ立後して其利を先手として張ふ
平勢子金人梁を多く敗して地向ふよし安へ成ふ是伝侍大廣孝
康重親吉等ふ評定して敵ハ大軍味方ハ小勢御合の戦ひ味方
の負ふ人ふ是ふ少し退て宮崎勝山の要害を定ふ
彼所ふて防へしと云ふ一変して勝山へ引入つ要害を拵ふ南て
所を焼掠し敵ふ毛を安く井ひ柵一重ふ引こうる様も拵へ
所ふて甲州の大兵を防へしと云へ是元より今石川勇士武勇
ふ賢き三河武士大敵を恐れ鉄炮を連ぬ行ふ去
初ふ成る事ふ多金人同ふ二の曲ひこうと攻寄ふ者鉄炮を
へ今旗の多を移ふて攻かるふ三河勢ハ宮崎勝山の切所を

左右に交りて相戰ふこと暫時なり信玄五百余人切先を揃へて切てかゝり
怒濤の如く戰ふ事利を得て大勢を只一もみに攻崩さんと
働けど兩人堅固に要害戰ひ常に孤と引揚揉合居れば
夕方迄に許先に信玄一旦兵粮田に納て又信玄大
に怒り下知を傳へ伺ひやかるる小勢に向て既に働掛る若し此一文
字に地かり猶負と一時に変をよと云て攻掛て下知を聞て元より勇猛
甲州勢喚や声を揚て攻かゝるに山本勘介の切出れば原隼人多勢
の中を退付ると多ひ揉合に合戰の間先鋒
揚合戰甲州勢先鋒の兵西落ならんと弁報を伝て引揚
退くと雖も敵方に吸付て三河勢ぬきつれ抜と切崩さ
ると雖も兩人の軍兵を討死する事三百余人に及け
れ共信玄に伝者攻あくと柳子に岩り合こなるに相原に扣へて主虎と
同所に引る時に引る惜見信房に本多余人勢を以風に引る
来り多に兵隊隊に成せしと吟へれ二山に陣を引
右伴の馬場に甲陽に多勢と自ら出馬と見あられ出陣有る
移に公の軍勢に掛りて信房に伝を突崩さんと早り出信房
嶮岨と雖に菊て三伝と設られを延引自中と怪ざるに伝て立しく
欲と脱て却る而に三度成の別 神君大高に陣中に出陣有て際に
を別に一揆起て浜松の城へ攻寄る乱説有に今有に陣拂ひ有之
欲に知に家康に人数と引上べしと出下知有て家康別に急に陣拂
して引に此れも馬場入道忠に出陣中に有て出るを信房に知
さんと思ひ人を波に出に 神君に大の手を引る馬に先陣に出の手

とゝてさいとゝ徳川家ハ内府の老世なるを以て此戦ハ伊勢
ハ彼此と関を作りなく多ハ伊藤元ハ籠城の老なれハ
伊を定め先多を制し暗に頼し有ハ忠義者我陣ハ志りくの方を
告て其ハ相ハ退ケ退ケ退ケ世よと其陣ハ至り見と吹立ル伊を保
切ハ其まハ和て退ケ退ケ彼方伊勢ハ遠ハ見を陣くるを沙汰を
知ハ其ハ退ケの関を作て引揚ん之ハ有ハ元より神君此孫にて
俄ハ関ハ声を揚て内井ハ忠次邪魔の旗を見上伏兵発て引揚
伊ハ窮て入ル其方ハ伊元ハ伊ハ伊天して見ル旗ハ窮ハ伊ハ
後ハ引ハ其方ハ士卒戦を好むへ敵ハ遠ハ退へしと下知を伊へて
其方ハ其ハ和て退ケハ又ハ再元ハ関を有して掛ハ一軍ハ其ハ入
ぎり喚きハ切ハ其ハ引揚ハ兵ハ其ハ有ハ内井ハ辛くして関戦

遠れ人数多く討ハ有ハ関ハ追ハ知ハ元より大ハ賀ハ廉ハ
ハより伊ハ多年ハ第ハ伊ハ旗ハ伊の大海を渡ハ伊ハ切て其ハ退ケ
其ハ中ハ也伊ハ伊の其ハ多ハ切ハ旗ハ其ハ伊ハ蔭て其ハ無限
ハて関廉の川を都ハ其ハ移て其ハ伊の内ハ伊ハ多ハ其ハ老ハ
ハ関を遠ハ其ハ中ハ川ハ其ハ多ハ流石ハ伊ハ多ハ伊を四民の陣ハ
連ハ我合ハ探合を立ハ多ハ旗を山ハ陣の旗を入遠ハ三ハ置ハ
ハ合ハ討ハ其ハ其ハ多ハ兵を乱せるハ伊ハ雑ハ伊ハ伊を
家ハ伊ハ伊ハ伊ハ引揚ハ家ハ公の出陣ハ伊ハ城ハ十ハ伊ハ
抽て責戦ハ甲首ハ討ハ鞭の第ハ伊ハ切ハ甲兵の退ハ退
ハ多ハ其ハ伊ハ伊ハ伊の花威ハ猩ハ其ハ舞ハ形ハ伊ハ投甲
此ハ定ハ郎の天御此第ハ立ハ抽ハ討ハ多ハ其ハ辛ハ助ハ人ハ

家より門方とかねて引退とこれるよりも速に敵ハ
来て十文字の槍を胸板に突付と突処を信房方ハ抜身なれ
ハ引て其のくるこハ如しと退くに歩一突出ハと稲妻のごとく方
抜てせんこと考より切れ方ハ卒十郎方ハ必ず大きを信房ハ北かるを
信房ハ北陸を張く踏入ハの方へ開きなるかとまつしと切れハ卒十郎か
見ぐるのまつれよりせんこんの抜と切付るハ卒十郎ハ何かハ此たまる
べきるより去迚抜ハ敵ハ先きみしこ槍なれハ首をもこそふを
味方ハ陣へ引入ハ時 神君ハ仇とハ退事なれしハ事有
ハ退歩の槍を守るべしと下知有て抜見を吹立せらるハ二別
警元ソと伝を聞て退止の槍を守るよりて信房ハ幸して
ハ陣へ引迚しハ多ハ時敵ハ人数多対を負の者有て頼ハ伝を

まとめて甲列へ引退を 神君ハ堀卒十郎ハ大死を御感あ
ハて其父卒十郎ハ入条ハ伝書を以地を深て下ハる 時時天正元年九月廿日の条之
天文ハ云
堀卒十郎能登守死 去迚ハ為後菩提安堀ハ四郎ハ子者
阿道事方ハ中絶抱ハ地を信茂ハ重ハ以ハ者
ハ為ハ出判形ハ永後後合免許を頼
ハて迚孔者ハ仍ハ必仕
天正元年癸酉九月 家康ハ判
堀卒十郎ハ入合ものへ
右卒十郎墓ハ大樹寺の地中竹内塚ハ有法名西蓮心光と云
去後築ハの五番目利ハ軍勢ハも此事を考ハ相ハ時家の戦を

くし記事ハ此度つぶやき記りるが如き十騎ゝ程ゝ小甲別へ引返し
信玄信玄大ハ驚き此時軍兵退らハ徳川家此方ハ必退討せられんハ必
定之ゝ古屋村原ハ合軍兵をまぐめ甲別へ引返さんとせられるら
流石勇武の三河勢安こゝハ引揚さしめるさへきと者ゝ曰奥平
助次郎をゝ出集ハ此此案内ハ知られハ後度して敵と陣き味方ハ敗
引揚へしてハ小仍て別助次郎ハ後度と定め九月廿三日ハ鶴山表城
引元りるハ三度信玄ハ陣を廣孝長次郎康重七ゝ助親吉頭伝宗
頭能茂子田義之一郎ハ見之ハ信玄ハ敗ハ二度ハ吐之切て加る
武田勢の後陣へひしゝと元付喚起叫て切立て奥平助次郎立ゝ
返し陣記戦ふとり此時ハ此時返ゝ麦原ハ甲兵多く討死して
鶴ゝ田原耳坂の辺之引揚ゝるハ頭原之井

戦後迫之信ひて武ハ横強ハ石破り又ハ茶臼を立切崩ゝ
戦ふ所助十郎子幸ゝ苦ハ働ハ信玄ハ不叶討死ハ之多の兵あり
為て信玄ハ傷ハ逃かる信玄ハ働を揚返し揚合戦ハ孔之ゝ軍
勢ハ平ハ敗ハ勝ハ之ハ親吉廣孝ハ之ゝ馬を乗切士卒之下
知して之ゝ之ハ想勢ハ逃之ハ信豊も漸三百騎ハ敗て
引返ゝ三河勢ハ之ゝ敵ハ既ハ敗ハ退之ゝ中の之ハ
之ゝ者ハ之ゝ退之ゝ之ゝ中ハ奥平貞能ハ怪卒ハ吐ハ之ゝ甲別
勢ハ中ハ之ゝ信玄ハ之ゝ知ハ之ハ岡ハ之ハ攻之ハ
甲兵退し会戦ハ之ゝ別勢ハ廣ゝ麦之ハ甲兵退ゝ安き
而ハ弓鉄砲ハ之ゝ中ハ退ひ又ハ之ハ後迫の石狭く退し敵ハ
攻而之ゝ大ハ不退信玄ハ退合ハ平あゝハ赤羽毛之云而之

苦戰して退くなり其利は西に出向ひ備を入替んと為す道狹し
て備孔を成す心不穩なる故不和備ふ故逆を兵を其利を備混雜
して列伍孔を成す徒有て三河勢退き〻手強く責る
ふようて其利を無も後ふ退き〻られて遠く甲別へ逃げ多
三河後風土記正統大全卷十九終

三河後風土記正統大全卷二十

武田徒頼拔高天神之事

扨て三河勢十分の徒軍ふて諸田の口と牧拂猪岡を揚て退し
ては神君を感賞為て奥平九八郎を長篠の城代とし松平伯耆守
伊昌あかの五番を〻へしと後ふ仍て長篠へ詰きりる 時甲別智先
年神君の出馬を以て諏訪原城を攻て多勝と為を長篠駐軍
の次第を甲別へ告る徒頼聞て大ふ怒り我拔て長篠の城を
攻拔奥平父子を生捕 竹谷を前引切へしと云り切又を
別かは昌幸次郎三郎信康に十五歳ふ初り為ふを大将軍とし後本軍
三郎の甲別方ふて三別を助ふ為りと攻ふふ大久保忠世
先ふ進と出和陣為れ信康に自ら出馬を出ひ九まあふぬ

陣を張り、されど是迄伏地なる城なれば、仍て各々信軍を賀し
まる。翌天正二年二月中旬、信玄甲信遠三の兵を率して、を列へ
井出を経て、信濃を探り、公に向て花やかに一戰し、風林寺口二つ山森の辺
湯山みて井頁し、而厚く賞を賜ふ。公は早血元を知らしに
依て、密事を深し、公今戰おのづから信玄に屈おく軍兵をまとめんと
仕るに、を列掛川の城主石川四向守家成、寛元の君若三人を拾て梁
伊の国に移し、近年信玄を井元今と別三人目道を伴ひ、何家信
玄に新城小陣を張て、伊られ、小本の男伊の男男より迫て、を移し
家族をとりて井小信玄に井頁く、信玄は強き拳を後ろに井頁く信玄
馬場小不知して、を見しめ、を別て、を首を刎て新城小
ケ谷に出て、筆小新城を築く。（剣淵の城）まより頁波の玉へ、向て伝ぜの

男村の城を責んと十八の宿を拾へられ、を行信より伝ぜ後信玄して出
る方小信玄信玄は山縁小六子衆人、長縁して、を藤田山へ向る。小伝ぜ
叶ハ、を思ふ、早と人数を引揚る。山縁小四里の原を退陣る。其
中小明る、此城を攻落しまゝ。阪狭間を落て入城す。藤田家の府伝後と
生捕信関を捕て、甲州へ引返す。武田家へ奪ハて、武田の
城を責元をみん者共を率して信玄の拾城天方を初て久瀬六笠
一の宮を攻落し、を小を列の城留を小、築山伊家おハ、
ゞ猴原浄を、西方へ、神君拾西小、を小築山原の石仕
ハせ、を小おの方と中せ、（後小路の局 元和五年己未十二月六日 越前小の殿 卒去七十二歳なり 長楽院 寛永寺 慶大姫と云 ハ是と）
を初、公沈鉦鉢の急、西厚肥を、し、府、西先の流石姓と、安倍氏石姓
西口に、公を、と、を、して、西迫を小信玄を引揚ハ、の急用なと下

されて出羽に下られ、その日俄に大雨して信夫石母屋へ入りさらに屋敷の
姉妹に茶花を供ずるに出でたりて妹お百と云ふ者出渡松へ出時
元を殺ひ多ふ稲ぶく膳所あり後ふ天正二年正月下旬雨夜の時
中多作殿へ義光ふて曲輪を通ふ女性泣き叫ぶ声ふ富ふ思い
立ち給ふ赤裸ふして松の木ふ志だり身あり作殿彼女の様ふ解て
様よと云ふ例お百の方へ築山殿茶瓶所にて新様ふ求められて別作殿
私宅へ同居せしふ忠勇の者なふ出家をしめし出中已ふ新屋
もめ申も思ひ中多者後守ふ家老中多半左衛門ふ仰母者ふれハ
公の出仰ふより出を云し表使と知し者ふ別れを呼ふ出仰母此
りて伊勢田へ向へ出と云ふ従ふ出ふ此ふ彼作母の休息ふ渡
松の所屋ふ至る後暫日経て公伊勢陣者作殿ふ出ふ中上

ふ公ふ向ふ出ふ作殿へ帰ると宣ふ程なく四月八日渡松の出
坂下者ふ村ふて出産ふ公伊寄三十三 お百の方ハ二度次男伊と云醫師を招
出肥長と吟味ふ養の出後者仍て半産と作ふ出者を中ふ
出うなつき出作ふ出て産角の作殿作殿又伝庵へ志りと
中ふる三郎君少し百日平日者と重ふ大切ふして養育せと作
有ふ後天正四年三月中旬 公思渡へ入ふせられる附伝庵仍より
作殿へ出門ふ作て出産者と誘ひ申ふ出ふ三郎殿出産ふ
出産の日ふ出陣ふ者ふ 公あの陣ふ者ふ者ふ何者と伝
あり三郎殿次へ出立者者と抱き作者へ出陣ふ思ハ私者ふ
出中上ふ 公ふ元へ出作出抱き出膝ふ上ふ産ふ出産ふ
作者三郎殿ふ出時作の者ふ上出産ふ出ふ出上ふ出ふ出

息男ふ為人仕いて私の能き力あて正度と正作　公市様照継時
市殿毛の後来玉光の市照指と云迚　此付ようとして故実伊丸様と
称す者　付若無り　越前家従三位中納言秀康卿市事人
市西おゝの方に永見新左衛門照又北經継の永見志摩守様毛
又格別大坂の伯村田喜衛門様と云是又此喜衛門事て村田清
左衛門と云秀康卿ふ仕　村田伝徳と号し越前福井此所まゝ云
相甲別事て　慶長元年六月十日事也　甲斐へ移り　石集
参て居りたふ　此度我と　格式と　徳川家ふ多攻元事ふ喜新返し
ふ言天神ふ笠原左衛門長忠と攻戦て　安倍の頃と　為さんと　欲き
是と者を　賞ひ天下破旬と　歎く　計り　為ふ　よりて　各中　同もかを　事時
る　場言　坂内　後　山　孫　羽　と　格へ　亡君　此事　と　号し　市　遺言　ひ　と
君市男　頭　後　部　亡　君　此　云　と　用　ひ　ふ　ひ　弾　更　大　悪　の　後　臣　の　市　義
ふ　臣　並　我　こ　ふ　諸　云　後　ふ　為　ひ　ぬ　云　ハ　我　こ　存　る　市　ハ　伝　云　の　市　遊　云　と　深
く　限　し　ひ　欲　存　ふ　ひ　此　事　為　ひ　る　ハ　義　ふ　伝　長　の　六　男　市　右　丸　南　北
ふ　者　て　音　為　れ　市　牙　迚　き　市　一　族　の　中　ふ　息　女　へ　嫁　せ　し　め　ひ　奪　云　り
後　ふ　東　戸　深　と　伝　長　ふ　返　し　市　和　睦　有　て　市　妹　茶　の　市　方　と　徳　川　家　の
舎　弟　孫　三　郎　殿　と　婚　姻　な　さ　し　め　ら　れ　た　と　別　て　弾　正　と　市　遊　し　有　て　徳　川
と　市　和　睦　ひ　と　信　長　殿　内　要　れ　欲　為　云　中　為　れ　ハ　南　家　と　和　睦　と　賜ひ
弟　迚　ふ　事　悲　ハ　人　と　時　為　為　の　氏　改　ふ　攻　か　り　ふ　条　と　麦　法　き　れ　実　ハ　別
市　ふ　ふ　入　て　皆　ひ　法　大　ふ　為　ひ　後　ハ　徳　田　徳　川　の　別　欲　有　ふ　ふ　見　ら　き　れ　ハ
と　時　ふ　有　ふ　と　と　し　為　ふ　ふ　ふ　ふ　ハ　為　ふ　て　法　ふ　退　ふ　見　れ　料　号　し　て　見
る　へ　し　て　跡　部　長　坂　ふ　ま　後　ま　る　為　宗　ら　云　伝　云　公　市　遊　云　ふ　四　人　の

陛下脆病出来て歌を者ども抜てけるを中人日比は大屋の上落
の企を見て今更織田徳川と和睦といふ甲斐なくはかばかりを上
南時義弘もかくこそ二代味方の小条を歌を志給ハんを四位の心ハは
天下の入者ども笑へい跡絶を法卒月命を捨切を者ども歌
歌へ返しさんぬ武田の名脆病を歌ハ留りこしふるのふるい
必ず此度用へ早し言天神へ此度向かて速ふ麦蔵武運を輝ら
さんとあん間をそなりて中ふ信教元より四位乃侍め不承知別
跡絶を捨ら間ふ隠ひ言天神を攻へきふ変定して軍勢催促者
仍て月下旬甲別を立を別へ攻掛ら初て六月十日より城をより
囲て透間もなく攻立る城百小笠原を八命忠吉八永禄年中帰川
ゆて戦ひ元亀年中信玄を別へ出陣の時も 神君ふ属して大切を

立て百大別の勇士ゆて赤縅ふ高男吉ハは後詰を麦照を初林平六伊
達を兵衛吉原又兵衛小沢左近林勇元を扇まし防戦ふ 神君八
信教を天神へ麦加るとゆ百六月十日汐皐八此使を以援兵を先
ゆふ伝出此返ゆ者ハは信教是ふ出るゆて者ゆ我て出馬まて
歌を者歌して引元ゆ林ふ此ゆ知あれ勇猛を以信教を討亡ひへしと
ゆて六月十四日伝出父子二万余人ふて麦を同十七日三別吉原ふ
陣有信教八為公此後詰ゆ大軍押寄ふ志強ならんゆく麦
歌せゆと息をつぎ麦立る城兵林平六後四人者ま吉原又兵衛
伊達を兵衛小沢左近武勇を振ひて突出く攻戦ふ甲別勢ゆて
引退く時伝房八信教の本陣へ来てゆ八城為小笠原八勇猛強く
城兵又必死を抜を城八寡兵の要害を力攻ふ麦ゆ百大中ゆ者ふは

義城を入るに先だち人数を引揚られまとりふさ時評議長坂中なる伝
云の由付代ふケ様の軍返しなるなるし世家老大勇申して勇命を大
事ふ存腰ふ抜ぬ渠ふ吳見を用ひめ兵糧兵器ふ攻破りあへて
内好をいふ信玄ふ勇を海ふ吳見い我心ふけふとて思攻を謀られ
信房又と信玄の陣へ来りかるい只今力攻みは人数を駆疲討ん
へしと云義の小城ふ多くの人数を費し麦義実織田徳川の大軍五
らば必敗軍なるへし是非一戦を思ひ信玄ふ行ひ申てなるざる
上北条と信玄ふ為ふ海ふ内せんやる信玄ふ勇あれども
信義ふ聞ふ信玄ふ利元来義ふ原を本意と為人みて採用を為ふ
原ふ防戦し小笠原ふ人数引き今川を源義元ふ由ふ盛を信ふ
る備ふ今川北条ふ氏義ふ駿河義元ふ背れ亡国ふ

歌戦を云ふ人之今信玄ふ義元を謀られ心を信ふ仕へと信玄
を後ふ国をらる仍て城下北を信を使として向後武田ふ仕へ只今
を北城を義ふ云ふ義隆河国を引張彼を掠ふ為て一方豊の不仕
今へ人と云る小笠原ふ義ふ迷ひ武田へ降参して城を後を信玄
ふ是義毋後ふ霜田刑部横田志摩ふ高坂弾正の三人を為て守
らしめ甲州へ引返に付信玄ふ三州吉田ふ石陣して後陣を
信玄ふ城を酒井忠次稜し信長より忠次ふ矢家ふ信玄を
後ふ神君も義井北沢ふ由出馬者て信長へ由義面者多ふ
言天神義城の地小笠原隆義の沢背返て ふ吉寿ふ為ふ石ひ
甲北を為ひ小笠原ふ御を後悔者ふ力義兵を狙めふを帝
信長 神君ふ向ひ浅井朝倉信玄ふ武田ふ歌義を弾先

争ふ知公の御助力ニて悪者を亡ぼしかくして勝頼を亡さんとす後
両家此力を合れ小田原を平均すへし　当年ハ左を別不作の事なきを申次第へ
らるへしとて　芦合の代を亡ぼしらるゝ　両人ニて諸将の面前ニて　大成記ニハ其説であり　見より両将
まて御協議ある
此小田原忠成ハ欲ニ眩り義を忘れ甲州へ仕へし甲州滅亡乃
後ニ徳川氏政を頼ミ家人となりぬ　公此忠を信長へ告かふ信長より
小田原へ下知ありて切腹させ首を小田原より浜松へ送られ之
扨勝頼ハ甲府ニ陣ありて所々北条相利の旗本ニ一門譜代の臣を
集め營庭有群臣ニ言を得ず高坂等ニ而て高坂昌信を戴
而る所長篠ニ於て所々人を待ニ向て中々仍ハまた両家ハ新府立て
より十九代の名家なるに勝頼の代ニ滅亡して定らるる其事ハ是也

御家来ハ悔しく見苦しく思ふらんと頼ミニ落涙しなからも当時出陣なく故京
の西にて誅られしと云跡部長坂ニ向て返答ニ嘿して高坂虎のよしなき
申事やとつぶやくを聞付内藤も進て出当家滅亡ニ及んさ年とる
へからずと当屋形ハ勝頼を乗れ御言ニ応じてあり侯人来往てる別ゞ不之
とやかれハ跡部ニ面して右様ニ家ニかいろおも内藤云时也ハ
語てゆかさん当来良源十八ヶ年の歌城を攻落し其上此度高天神城
堪ふと誇るゆゑ思召無残ふ元より勝ふとも御辺此所ニ捨人をも所存ニ委て猿ニ
勝頼をと申ハ当分御構ひに誇る事を行要しくて利欲ものを先とす
是と人面獣心と云者ハ信玄公ハ名将なれ共去法くて兵法の合戦は
なしゆハ信玄の勇威ニて当屋形を振立ぬゆゑ東良源ある小城ハ
一日の中ニ十や十五ハ揃の数ニ有へからず既ニ味方ヶ原　戦の時も臣等が旅

小陸ひ於ひ刑部へ引退ひ居ける時伊藤惣兵衛ハ
信人の中事と方なる許容有て退身 織田徳川の後款ハ對し奉ハ
今我と云ふ人へし其時菊家譜代の長臣討死して武田家一門ハ滅亡し
累代其侍の甲陽は府館ハ虛しく孤狸の栖となり人ハ寂寞たる
うめく其時ハ多り昔榮ハ信人君之後ハ主之逆出路絶ハ机て先義を
おさん時ハ忠義を思ひ知るへし彼云ふ者ハ中世より悪義逆を
きはめ者と云さしと云る揚て中りハ猪飼右ハ主服者ハ信人を所行を
極る又云ふ人ハ河野常右衛門ハ誰も河と出ハ去ハ長坂跡部と是ハ
いまだ二身不真中者退出ハ長坂跡部ハ四臣之後言書ハ猪
飼伊藤日ハ荒月ハ家臣を率動ハ仍て四臣の大云後ハ後ハ
那て九月中旬猪飼又と云別後相迎へ出張者ハ帝天誅川縣後水出

左ハ仍て安井内者を多ハ以て主源後と何ハ主を出と信を及ハ
神君ハ信ハ為て大久保七郎右衛門忠世田沼右衛門忠佐中多平八郎忠勝
多兵衛右衛門元忠榊村彦左衛門内後三右衛門四郎右衛門日下部兵右衛門
村上源右衛門加藤彦兵衛山本常力服部半蔵書小後七安部右九郎
高木九助榊原孫七郎小栗信右衛門梶金平
酒井左四郎浅野七郎兵衛部筑右衛門松下右衛門僅四百余人班向ひ
松平と云ハ武田勢川を渡る人ハ松平右衛門を先を渡を川原ハ右の
孤場を殘し敵兵川を渡ハ主を井人と為ハ甲州雜兵
一番乗を後殿の上る者と拾て川向の敵兵出ハ 西井数せて下
知しハ二番乗を向て出ハ 川西を出ハ主中ハて敵
を切り渡松平と云ハ 世之第小猪飼岩ハ集て

をあやかれと大音声にて名乗りかけあれば甲州勢打渡さんと乗向ふる水
を流すべき様なし渡せども板垣勢より五騎の兵川下四五町乗下して
川乃度際より一文字に渡せ（五騎の兵は字地武井志村東河地）渡れ方々と号令を
安部雲九郎大久保兄弟乗向ふ三ツ股の征矢を早打ち甲州勢
三人川中へ押流さるるを見て胡地乗強河の陣中より是を見て谷川
右京亮を初め乗入渡つる所に阿川渡せと見て後軍大音声にて
呼ばれ渡せ味方を見かけ見むに討死を極る者共是を討たるは
弓矢の恥なり命の惜しき者は只一人も此度義達渡せと言切り乗入
るを見て沙万余人我も〳〵と一文に乗入渡せども渡れ勢小天狗
の方へ引退く　神慮に小天狗と伝出馬し栗田と名乗て大将見付れと
命令ありし栗田七九郎重利裏て後軍に抽て小天狗に乗越し礫打に

迫て来る武田方にも渡れ
と甲州勢は後先を所詮に
右京亮を初め乗入渡せども
馬より立猪頭を変を渡せ渡れ
と信玄つるを仕立て立て栗田は乗馬上にて我れ
の後人迫来ると知られ敵の先を一散に引退る渡
渡に引ぬる退討合せるを服部重左衛門と捧て切る
相猪郷八小天狗を乗る処に川向は渡れ勢矢鉄砲を揃へて
待かけ乗る刺へ右川仙者守数四大炮を放て廉を梯乗小平を
廉政七子余人旗を翻し小天狗へ近付る猪郷警固歌小勢
を敗くに大勢にて大河へ押入るを討合を川を渡るべきに

下知して山縣三郎兵衛昌景小笠原与八郎太吉に後度させ池田の家へ打
入ける其後も信玄家康と戦ひて織田徳川の両家を追合常に絶ざり
ける　却て天正三年信玄又長坂釣閑跡部大炊介両人
拓て計ける八海に何卒調略を以し三河武者の内味方へ内通の者
をこしらへ其内應の日限を極めて味方出張を定て徳川出勢あらん
其時一味同心の者共俄に空虚を伺ひ濱松を責討ハ勝頼の歓に
損得せんと揮掛す討出ら八手に應して聚をつるむもぬからんと評定有
両人柏ハ調略に及ハすに其役を別に大賀弥四郎といふ者有是ハ濱
仲間にて有けるを其才覚有る者にて殊に地方に達し無毎の積り
能く計ひけるによりて御備方紹方に役人に立身しける後ハ重き勤役
各承りて弊を出し領ける所に仍て俄に立身し後に大分れ賦所地の代官

職を従上り平日ハ濱松に出諸用務ハ岡崎へも参上信康卿の御用をも
相勤る程利口なる者なれハ此弥四郎か事にてハ不叶とて上下共に諂かに
寵ありける様に弥四郎初の程ハ人々に敬し家とハ僕に残ひ仕ける
出世せし後者共ハ代て威をもつ人にて当時立身致せしかとて其上在地ハ
思ひも寄ぬと御家中振舞横柄なる時も己より遥下なる役人共を下知
或ハ昔の詞をかしも聞ず振廻りけるか次第の移り身を上も忘れ奢り
四月ニ寄合や御家の屋しき振舞して御旗本にて将軍の御用に立し武篇
執政度中存知出会にも見ぬふりを致ものに仍て人々面を伏て存しか
かくて両天狗ハ其身高足語ゆえ思に足語ものにて武士に語りて是の御
伺に当て挨拶もせん要れに及ぶ故に御家中の人々不屈とハ存ながら
主君の御前近く出る者なる故なれハ人々見を憚り口を閉て其

亡れを咎る者もなかりける後ふいらるる後これ後ろん長坂邸に大賀
小中を立てりるハ（大賀秘蔵せる書の類を）（若武田家へ内意を伝ふ今此孫ハ十
信は知りを与ふハ北を云ふる元より大賀形勢偵察若あれハ別を紙
学ぶ故ふ長坂跡部孫兵衛を以て今沼を捕ふ内
意の事を勧めて仍て沼部命令を高れて徐ろに内意
沼相を伺ひ見れ一人の力ふ叶ひ難くや思ふん跡部長坂ふ立ちる度慮の
今甲斐ふ又し今子を元亨て年所を之の交りをる小谷原山田義之
訪ふひ皆ふ一人の怨ふ祝りて四心沼者又与党を集めん之時に命ぜ
量りる家ふ又近後伺ふ命を以ふ若者を心宮猛ふして度忠公
市代より毎度立て寄の市家公い立し武田の者を成時 神君呂宿近道
市度飛ふ出き毎る時彼近後伺ふ命ハ国を捨る下命ハ中へ立て自刃

苗を立て抜立りるる市出を立て田中へ敵を立入泥を刃見れ
如抜ふ公見ひ市伺元へあれハ近後ふて市ハ近後ふ
呼第九を伺ふ立り近後ふ初と中もは力及ぶ畏ふて面を
洗ひ田抜ふ様を立蓋ふ立を立て重下ふ力根を抜刃を立る
四郎ふ立て近ふ上り市蓋ふ実ふ者る刃ふは限帰ふ抜れる立ふ縄を
助を立て立れハ用も尚られ者抜へ市伺伺案中切も実止ふり伺会ふを名
汗を流ふ市ふ公の思ハ一向ふ抜ふ立て立る小刃ふれハ立方抜を初め
家中の者を命ふる立ふ出る事も為く尚家ふ命ふりふて人る武名
嘆ふもふ少ふれ抜ふ伺ふ抜を立て自刃辛苦を被立る立後ふ沼ふ今
の内伺ふ立て後業ふもいて立後さ寺公せよ我も人も業ふ苦労を
して陽ふ出を立る抜ふ心ふ立る抜でし又ふ沼て無ひを伺ふれ市国を

隆平法へハ近度ハ中ふ不及ハ供の人とも見と承り聞と流石ニ
多勢ふ成家体の近度ハ加増相成ふ及ハ候し浦四郎方へ移ひ申
所ニ変ハ人と申ス如ふ大賀ハ成島一人と今業の者と加へ人と思ひ
成ハ近度ハ無ていふ所ハ加増無ハ者ハ一家と
申ス中ふ有ハ家ふ成て元ふ中上ハ加増
成と成今度ハ何ハ者も候ハ公務と申し浦四郎相勤と
御異ハ成し思ひ申ふ成ハ我ハ也生涯を申上ハ近度ハ
ハ無ハ仰ふ成ハ候て ハ之ハ東ふ酒井石川の人方へ成ハ
成ハ相成ハ候ハ加増ハ上ハ上ハ中ハ更ハ中ハ成ハ家ハ之ハ成ハ上
ら成ハ之中ハ有人大ふ驚ハ成 廉忠の一言と成ハ上ふ成ハ家ハ
上ハ為て成ハ中ハ之ハ此ハ為ふ近度中ハ上ハ之ハ成ハ不限法ハ切腹

成ハ仰ハ連も中更ハ事ハ有もよ成ハ中ハ子細社者ハ成ハ之ハ
之成中ハ上ハ成ハ成ハ近度ハ今日大賀浦四郎相成ふ中ハ今度の加
加増ハ渠ハ相成ハ成ハ成ハ浦ハ公廉ハ成ハ浦ハ成ハ存世ハ相成
中ハ成ハ相成ふ成ハ浦ハ待ハ迷忠仕ハ成ハ家中ふ限ハ成ハ大悪人相
浦四郎相ふ成ハ成ハ加増相成ハ成ハ武士ハ稼ハ成ハ成ハ一
程ハ中更ハ有ハ成ハ成ハ不限法ハ腹ハ切ハ浦四郎ハ相成ハ
の成ハ加増ハ弓矢ハ情ハ成ハ相成ハ成ハ成ハ家老中ハ下
ハ細ハ成ハ御耳ふ達ハ成ハ 公ハ成ハ近度ハ成ハ成ハ成ハ
ハ成ハ又成ハ浦四郎ハ悪ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
成言上ハ 公ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ
の浦四郎ハ家ハ中ハ日ハ中ハ一ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ成ハ

味方作内左衛門尉人々ハ伯耆国ニ帰ル由聞ハ及ぶ事なれハ山田
八郎宮内少輔殿と大内弾正忠大隅守殿ハ左右ニ寄ス中ニ立ル
大賀弥四郎武恵堂を誘ひ見助城を攻て武田信親と長浜の城
へ引入ル巧ミハ某ハ弥四郎ハ伯耆国ニ帰云ハ祝ハれ孫ハ一味信ハ大熟と
称ハ僧乃怨心ハ其信の旦那ハ背きなんず天ハの神も忘ル
此謀を法ハ衆と謀ル人ハ有ル所ハ中ハ仍て大隅守殿
き八郎を八幡人と称ス中ハ平家ハ也城し　公ハ法ハ
仍て号大賀ハ命せられ大須賀ハ小笠原ハ搦め捕捕岡崎ハ責れ
ハ後ハ衆ハ仰ハ及信親ハ配書文并庫裏の金ハ及内裏の密書
捧ル恐れしハ大賀ハ谷ハ従親忠孫殺せられ弾ハ弥四郎ハ小笠
和妻子ハ川ハ上て命ハ原と引ハ西へ逃ハ中ハも弥四郎ハ

大恩を受ハ亡さんと志ハ大猫ハ者ハ有て須松城ハ
西城ハ此所中川ハ上れ後長浜の城ハ逃ハて首ハ上ハ出ハ下ハ去ハ埋め
竹藪ハ首ハ川ハ後磔ハ上ハ上られ
抑も天正二年十月廿八日甲州ハ山縣ハ高坂ハ馬場ハ内藤ハ和
泉ハ山田等合ハて東年北條氏の評後者　是ハ信玄の時代より五年の合戦ハ四度ハ今年ハ後し信玄
ハ子ハ二今信親の代ハ日孫　長坂跡部ハ信親ハ駆逐せるを集ハ上ハ此席へ参りて
山縣度推ハ信玄ハ入来ハ内義経氣の生質ハ勝れ数ハ振舞を
思ハれハ者人ハ白て只今名来ハ何ハ為ハや信玄ハ生世の時ハ
来年北軍議評定ハ我と承り諸ハ屈強の軍議ハ自余ハ評議ハ
誓ハ深密ハ者ハ我と四人ハ原ハ山田左屋の門一番人ハ加ハ勝ハ者ハ
西運枝ハ中ハ原ハ左屋ハ門ハ浅ハ中ハ岩殿の様云

同じく捧ぎ之れなり為人の分際は世産へ推察は之を無れ尚度形の思召
絶まず出沢新之様へやもとれは度らる只苦しきよ存ぜの数ヶ所
思く立さ迄よ但は退立へさること此中なるを以て 跡新は南面して何なり
長坂殿は内度度に似合ざる事云見此方に成の人数に加りやさ度云
に此を先心を静めて多治へ軍議の初まりぬ前に我に等り信玄の思
召をも申談ぬ度 何公者の古伝玄の心中は者は初る時は申して
に思に成心外は此一言に新りれと云昌豊井勇い信玄公とても度人にても
天生人にても有し 伝玄四は此子に此意を和社なくとも大方は推
量せり此話は昌豊に理を諭られ考へき様面に成まく無古に但せて
云談と世られと出沢新の時に成ふに其家と置る頃徳寄は修理之家
め是は余り強意之光度に我ふは城をも新り立城して は甲府の

為る事は少し的宗様は平生此者に立て信玄公の心内存よく知る様は中
方とも少なへと的宗に向ひ度形は思召め何と問的宗されは信玄の
心内存は一通年は内尾徳之此間にて徳川殿内の両家と十死一生の
会戦と之を待頃と一時に変さられんも思召と云を時内度居丈言
に成何今の一云の待形に申奥意さに丈て長宗狐と云古狐申心
腹に入て程は母第に成何事武田家と亡し已の本意と達さんと云
有る者の本南家に志化狐あり之古狐の子と長坂源右衛門狐と云
彼子狐を帰家信々と進め逆心せんと申ひしに然てさひなや之功
新は者る家化をさ為ひて信玄公に教されり狐是を怒を事
意と達さんと程ふと云的宗双眼に血を注へ変念の四度面色に成
一度なるは内度の勇威に感れ 国を帰中て出は内度主の法印の言

業せられ源の帝は己が罪科に依せられて何ぞ某一旦君に隙を合はせ
いふ情しを思ひ出でて此人を畜生にたとへられて討果しても余
あり君に事を命じ何ぞ私の恨ふるを中さんと信の心より怒りの胸と
さすると七十さい内府大多勝海の枝成の忠五郎が信人何ぞ君の為
と存べき只主家なるあり皆腰抜の心よりして花柳の虚言と云事
面を振世界と為らひ外北面を知らず不儀の者ふ子と報されて何の為
ふ世ふ交りて老年北方宮ふ預られて祈るも寄なりふ人も不便と思
べきふ我ふ向ふさうひ血気盛んの二男ふ枝と会稽を多き剃
当家古老の侍ふ枝ふ諫言を海肥前好曲の口を叩くも三嶽
の強弓もたせふ内宋大ふ驚く西辺ハ余吉ふ仕を枝との恵和北河
今北云ふ所北の面壁枝ふ勇て云口上之已すて兄の二男下信寿を信盧の

を討ふ多二不依没収せられ故伝云ふ枝退　程為を忘し今ハ
内府と名乗出而ハ十郎の大将と云ふ為ふ何ぞ出て云れ神を武勇の能
為枝の大義と為しるを諸北中人と力ふ多と加くる内府忠を抜義
度恢を已ら枝成高生と切ていハ内府ら力北沢れたき敷しで仕ふ
と勢ふ力押を討人を生を馬場山孫ら坂元弁当知れ兵坂を
東ふ出田左右より元を くめて川内崎ら宿ふ返しる長坂を
む移ふ思ひ出逃偽形の業ふ出当家奈の業の心ふ天下入智ら君と
已さんを祈りをてさあらと河を流し中ら偽形真をさ反しを子神
いらふと弱らら内宋云大義をも不存者ふ為れ不所を強ら
一揆のこをあし強ふ左大功武器を上右れ一命を大事と存君ふ向て
強云ひて我ふ枝ふハ横枝と働き見を西月ふ住る見を中と君に

年為伯耆守父信玄公徳川織田の両家と婚姻を結ばれ
今も東濃小里村郷の大寺を別小二股三河小設乗寺なるべし
天正元年武田家滅亡後東濃十八ヶ所僧侶時も老臣共内小攻落され
小里京小言天神を攻落せ時も老臣共東濃を別小て小会戦を用
と伝云也夫を用ひいて信玄公の代小習らん男村三ヶ条教へ
城来歌今小歌なへきを詠歌と其人伝云中せし左伝多小入るの
小皆と伝所なと天命小忘れ武田家滅亡上杉謙信小仕へ
みひいも 猶勝頼て海内中ゆく四人の者先父の遺命を守り甲州小引
籠り時を待へしと伝云家心小忘れ叶今より海内人心を今を
天下世制の大功を立へしと武田中多去頼小信玄玄元天正元年癸酉
四月十日迄去ると三年目小源く叶事と陽見へき遺命なれ叶年

天正三年四月十日七佛寺抵小仕て堅の法人初て是を知り心を
変して敵小組る者多り多り敵小四百九面し猶勝頼を伝織田徳川
の豪家へ合戦して南家を攻亡さんと企義密なれ主伝急り者へ
から伝と心を寄して守防の備義なり 徳小奥平貞能貞昌父子云
四月八月より徳川家小恒姫して三方長篠小籠城小信て猶勝頼大可
憐り徳老臣と為て第多小三別長篠の城を徳川家へ奪さられ
年元亡く罪小知と伝て通り長篠表へ義向し者共一戦と為へきと
者りれ小る鳥山孫伝て云叶事多小更小徳へ小流出長篠の城敵小為は
言天神城味方成御れ小年角の事小して又小猶勝頼を十一迄年
并後兵革の為小玉撃へ民営を玉中粮乏し徳多小長途を経
流く敵を入働き徳を攻ム小、織田徳川の両家後詰者へき事必定

為り後ハ大津北軍ヲ以て充能戦ヲ以て皆荒れ人馬乃
疲労を補ひて敵兵の虚を伺ひて味方の城を攻ハ味方出張
者て不利と申る長坂釣閑斎を出申るハ敵兵共中不意一
陣ヲ破れて退て思無之と兵ハ只今味方兵を納め後の作
と為さハ扨ハ信玄死去有と歯家の武勇を見限り敵方ハ疑ひ味方
北法ハ元を為し心を変ずる族も有へきなり主の裏切民の疲労を
出脇ひ此ハ諸隠の世又ハ戦ヲ以ハ孔明も用ヲ知ら民ハ攻を不攻ハ
守ると名ヲ以て思ハ其民ハ攻時ハ攻ヲ守時ハ守ハ作の就て後
と悔ヲ来も有く中義ハ後悔收ひて内族妻稍も照覚あれ此中思ひ
留るましと拙言を立られ此ハ馬山縁の後先ハ長坂釣閑の無気
の強言不拘心ハ此へとも後悔妻二の篠原荒妻同を少人家此誓言を

節ヲ以ハ五三の諸云ハ不為して各退出ハ為ハ面て其家秋言為ハ
只今北ハ有ハ武田家ハ滅亡を為ハ まし此度の軍後ハ有ハ面て討
死して本家を全ハ べきこと申合ハ為ハ果して古老の妻数を
て討死をこそ為ハ為て後悔ハ古老此後を用ひも天三三年
四月中旬甲府を変馬せられ先奥平九郎の妻子甲州ハ立為
と風来寺合別堂ハ僧ハ出せられ去れハ本従ハ面と小ハ武田
遺臣ハ信連 穴山殿ハ大夫入ハ板垣武田左馬ハ信春武田兵庫ハ信実
馬場民部ハ信房 山縣三郎兵衛尉昌景 内藤修理亮昌豊 小山田兵衛尉信茂
原美人佐昌郷 跡部大炊ハ後悔資ハ田源左衛信俊 舎弟兵部少輔
小幡上総介彩新兵衛 真利三郎四郎 年月忘 安中左近 高坂源
五郎小笠原掃部大夫 和田左衛門佐 松尾豊河守 五郎刑部丞 長沼

雅楽助松本兵部進小泉源五郎相木市兵衛三枝勘解由左衛門
惣蔵初鹿野伝右衛門左近右兵衛尉信近小山田備中守小幡左衛門尉小
山田掃部同孫助同八左衛門横田十郎兵衛長坂釣閑以下都合三万
余人甲州を打立先信濃へ發向れ諏訪大明神へ参詣有しまして彼社
へ馬を引かれ又宝前に願書を立かな時信玄より御伝る亀
甲此楯無梅檀巻より抜れし社家不思議なれまずより高き所へ気をゆるめかし附
板橋を馬にて渡し有けるに いかにも堅固なる橋中より落て口捕三人
死せざるは只勝頼馬上にて達者なれ列席かくを聞て既に云て云孫献
なふまふより遠州へ平山越を経て三河国宇利に出長篠を攻へ令揮諸ふた
勝頼は大居る山に本陣を居へられけるが武田左馬介信豊を招て汝は
七千余騎を引率して三州吉田の城を囲て一攻せめよと下知に任せ給ふ

左馬介信豊武田十郎諸兵を引連三州吉田の城を攻かかる城主酒井左衛門
尉忠次加勢松平又七郎家信矢炮を放して相支防戦に及ぶ速に落城せ
へし大兵へより多に戸田左門一西大須賀五郎左衛門加勢の為に馳出る甲州
勢此陣中にいかなる馬手の者か云出けん徳川家後詰として出張あり
家康は後口を取切よし申ければ信豊も大に驚きし徳川家出馬あらば定て大
軍なるべし此所を引揚て勝頼と一手に成て後陣をも支べしとて兵
を収め打て長篠へ引返す此時長篠の城将は奥平九八郎貞昌援
将として五井の松平弥九郎景忠（後太郎左衛門と云）形の原の松平又七郎家忠（後紀伊守）
其勢八百余人籠兵は後に一千人余ありしとなり時に天正三年五月朔日
巳の刻より甲州兵一万七千余人楯竹束を付寄り大手搦手時に会
息もつかず攻かかる此所は城に添れ松の方へ寄られば諸兵是に集まん

正洋定正及ばるに此度れ義隆に第一の正約諸に行をられ信長へ
接近を諸侯せられ為なれ後諸正保し者金を給中上ばるに
神君暫正思惟の正様子之石川数正進言出て先年て小笠原長
吉ら言天神に祈りし時信長大軍を引率し正が智に及しに
長吉慈心の為に敬に降参せるに軍を班させるの形苦渋井朝
倉信長に大敵織田家と弾先を争に知家君北助力参に悉者亡
しつ久しらにて武田を亡さんを時為家の力を以ふを辛くきを
主て徳形を以て出て帰刻に名を世諸へと異し間を残し久に人今敗に
徳形を策を誘れて遂ても御事彼家滅亡の賜ら又し軍要波
阜の正使を立させるに為諸とに徳形と要二れ正一戦を徳を出し必
定北正徳利ふて正まを中ばるに
神君曽石海の孫に家に蔵ばるに去

信長俄まて武田家の英雄を惜まるに出陣の後如何あらんと思へ
武田敗に大軍を奥平を係く根と叶城を責立後諸を防今の後
諸に有まるれに家一族をれの後諸中と叶ましと正保後に
ばるに別に栗大六を常を石出さ成波別波阜への正使を命をられ
を後家に石出されて何事やらん使られるとに左を為を
如し形て主常に行馬に栗を馳て昼夜を見らす波阜に到りて
使人乃左の尉使を以て此旨を中ばるに信長別諸老を呼て
評定に及ばるに多く思案に有ばん栗を石出さるに不及よて
正返を有ばに使の旨を左の左るに無に迫年井優ば石無葉に
民王義を中と無粮運を以下自中ばに大軍を新雑まく
ばと此が智を以徳形に後事に射し難し先時変に後川家調書を以

武田方降参と聞へしを虚説と思へ共遠国人数を出し一戦して
武田家を亡さんとの事へ有り小栗別畏て主後法久寺へ退
矢部善七郎ふかりは信の御芽畏に成り家康先年信長公
さこ交和誓ひ別て安ふ危ふ除て叛助第へ敵第一合ひと云別
の仕て本清井胡金市退治の打苦も家康牙命を入り見て既ふ
大敵を切崩して上京第今度信玄猛勢と云を三の月へ九入の時
ふ迄て市助勢為紀ハ忠先主その市為ハ遠家の様子もて成
以来九輝世ふと今一度市吟味ふ下以様西様を為ると
矢部善七郎ハ信長に罷出の近臣為ふて別様ふ及以如信長
以吟味ふ以の外ふ真の様子ふて渠既ふ使者として百人の金令
為ふ為様ふ のるを市為ふ 為ふハ渠ふ百出て来ふ

返答ふ来ふ信玄仰て小栗ハ信長ふ信玄ハ海我返答
を百人ふ為ふ様子の後を中条を市為て去年信玄大軍を以
言天神の城を責国家廉後の様子我ふ見て叛人為ふ出法
して只一戦ふ信玄を亡さんと軍兵を揃出て我ふ大軍を後ふ
為て城為ふ籠家を八幡ハ信玄ふ為ふ家廉なられざる
事為ふ我ふ人数を後ふ出さるとふ為ふ此度ても負昌ふ為
ふ為ふ後の城大軍を以人取ハ又ハ我ふ出馬為ふ以為ふ天神の
城ハ厳強ふ為ふ人を為して為ふ信玄兵を出
事ふ為ふ西為て此方を後ふ家へ為ふ此の外ふ為ふ帰為て聊為
此様ふ為ふ為ふ時ふ為ふ退き吾七郎ふ向て申ハ江ふ婦川
江別兵作武ハ敵為令ふ為ふ初として信玄公の市為後九死一生

敵ひ来りしたる事無かりしを思ひ給ひ器の法の上ハ先
角と申ふ不及詳の新ふて伝長公と伝米公と申さ世ふて士ハ言を
倉まれとつて況や大将の一言をハ申さ重ぶ自ら破て人を破ふ自ら
ちとなりて人をもとちとなふと以て
有ましきを以て定て左別を以武田累様ハ豆人ふ先を立て南を有
攻をりゆされんハ必定之ハ時ハ南ハ猛将の猪武と豆人の知勇を
尾別と攻んふ何程の事ふ有へき持を数へて南を破ら人を付
必後悔ふ有ふ有て云ふて出んと云て伝長大ふ怒りみび吾七郎
と云事ふ成ら人ふ成ら人ふ成ら家を急ぐ空石原ら家大軍を率
て必援兵を加へ給へ之と即時ふ軍令を出陣ふ及ふれて
中黒重常ふ成ひて夏礼謝して後松へ帰ふ諸ふ四方ふ使

して君命を恥しめざる勇士の振舞やと織田家ふても小栗を賞
美ふ成ふ

件の矢部吾七郎ハ伝米の近臣ふて諸方ふ働き誉れ人ふ
者ふ成ふ名を知者ふ成ふ早世ふして子孫世業ふ始末ふ
肝要ふしふも陳あれハ竹村を割り石仕の者ふも一日ふ伺合
ふて後ふ付て制ふ也要ふ竹村とて世ふ隠れなく方ふより
実ふ名人ふ云ふ士ハ士の設ふて有身の上を元上たまふ
ハ人ハ職人ふて社あれ迚も面上を立ふ有ふハ人事ふうつく
しき事ハ習ハて竹村を割らる事ハ嗚呼ましさと世上
ふてハ沙汰しふ事ふ成ふも矢部吾七郎大名ふ
なりハ竹の二侯よハ不思議と唱ひふふ吾七郎ふも

加田八郎右衛門殿ハ九月ニ死去ス五十ニ成ル一生ノ
間小身ニテ暮シタル人ナリ

三河後風土記正説大全巻二十終

嘉永三庚戌年　二月中旬記筆
八月上旬

少納言無二之満
竹源用